Osaka University Knowledge Archive

Title	シュルレアリスムのアメリカ
Author(s)	谷川, 渥
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57845
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【52】

氏　　名	谷川　渥（たにがわ　あつし）
博士の専攻分野の名称	博　士（文　学）
学　位　記　番　号	第　２３４３４　号
学位授与年月日	平成21年12月７日
学位授与の要件	学位規則第４条第２項該当
学　位　論　文　名	シュルレアリスムのアメリカ
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　上倉　庸敬 （副査） 教　授　藤田　治彦　　教　授　望月　太郎　　准教授　三宅　祥雄 准教授　伊東　信宏

論　文　内　容　の　要　旨

ヘレニズムとヘブライズムという二大原理がヨーロッパ文明を構成してきた。二つの原理の融合し展開したさきに、ルネサンス以来のキリスト教ヨーロッパにおける文明と芸術があらわれる。そうした文明と芸術を二つながら忌避しようとしたのが、シュルレアリスムであった。その出発にあたって、アメリカ合衆国はシュルレアリストたちの視界に入っていなかったが、それが大きな存在として浮上してくるのが、現代の世界である。実際、第二次大戦の勃発と前後してシュルレアリストたちは多く合衆国へ亡命移住せざるをえなくなった。本論文は、海を渡ったシュルレアリストたちのアメリカでの言動と、アメリカ側の反応を中軸にすえて、ひとつのシュルレアリスム論をこころみる。註をふくめて本文はB5判で263頁である。400字詰原稿用紙に換算しておよそ650枚。さらに、モノクロ図版39葉、カラー図版7葉、人名索引8頁、参考文献一覧6頁が加わる。

本論文は、かならずしも個々の芸術家たちを年代誌ふうに追ってはいない。時代も大戦時のみに限られてはいない。独自な切り口をもった都合8つの章が1つに合して、全体として「シュルレアリスムのアメリカ」という主題を提示し奏でるのである。

第1章「ブルトンとピカソ　接近遭遇」。ブルトンによれば、シュルレアリスム随一の絵画は、外界に対して内界を護っている点においてピカソ、のはずであった。しかしピカソはその後、外界のオブジェに向かう。両者はブルトンの意図において接近は可能であっても、事実上はけっして相容れない、それぞれの「イスム」である。

第2章「グラディーヴァ・ノート」。グラディーヴァはフロイトが分析した、小説の女主人公。「女性」性が、そのメタモルフォーズの可能性ゆえに、シュルレアリスムにおいて神話的な形象となったことを、エルンスト、ガラ、エリュアール、ダリ、さらにマッソンを俯瞰して説き明かす。

第3章「マグリットvsグリーンバーグ」。もとよりマグリットは亡命芸術家ではない。だが絵画の在り方を括弧に入れてしまうその作品を、グリーンバーグのモダニズム論にぶつけてみよう。批評家のいう絵画の自己批判性、自己言及性は、画家の作品のそれと齟齬している。そのことが、おのずと明らかになろう。

第4章「マルセル・デュシャン　解答なき問題」。絵画を放棄したデュシャンは、グリーンバーグのモダニズム論のなかに、まったく場所をもっていない。しかし、高次元から低次元へ投影された影にこだわるがゆえに、シュルレアリスムでは重要な意味をもつ一つの「問題系」ということができよう。

第5章「サルバドール・ダリ　表層のバロック的遁走」。ダリをグリーンバーグは「よいフェルメール」に対する「悪いダリ」と称した。しかし、ダリの「偏執狂」的な方法はじつはフェルメールにも通じる「批判的」な方法であり、その一見、矛盾した在り方によって、ダリは「モダニズム問題」を一身に集約しているといえよう。

第6章「アンドレ・マッソン　オートマティスムの絵画」。オートマティスムの意義を十全に自覚して、その問題を引き受けたマッソンの軌跡を追う。マッソンがオートマティスムに求めたものは、隠喩ではなく換喩、夢ではなく変身、存在ではなく生成、アポロンではなくディオニュソスであった。そこが、ブルトンと訣別し、グリーンバーグに肩入れされる一点である。

第7章「ニューヨーク　一九四二年」。ブルトンとデュシャンを中心とするニューヨークのシュルレアリストたちが、1942年、雑誌の刊行と展覧会の開催に力を注ぐようすを、つぶさに実証しよう。そこから明確になってくるのは、ブルトンとデュシャンの相違、芸術の見かた、社交性、要するに人間性の全体から見た相違である。

第八章「シュルレアリスムと抽象表現主義」。エルンスト、マッタ、ゴーキー、ポロックの4画家をとりあげ、アメリカに亡命したシュルレアリストたちと、台頭してきた新しいアメリカの力、のちに抽象表現主義者とよばれる画家たちの配置図を作成する。ゴーキーはブルトンも注目しないわけではなかったが、ポロックはもはやグリーンバーグ独りのものであった。

アメリカのシュルレアリスムは、ブルトンvsグリーンバーグの言説が両軸に、まずは以上のように構築することができるであろう。

論文審査の結果の要旨

第2次世界大戦を機に、ニューヨークへ移り住んだヨーロッパの芸術家たち、ことにシュルレアリストたちの動向とその意義を明らかにするという課題は、フランスとアメリカそれぞれの美術の研究者なら、誰もがこころざすテーマであろう。シュルレアリスムあるいは抽象表現主義の研究者は、いうまでもない。しかし、一部を考察した論考はあるが、本論文のように、その全体を把えようという意図のもと、纏まったかたちで発表されたものは、少なくとも日本にはなかった。

シュルレアリスムとアメリカという問題は、たんにヨーロッパ大陸と新大陸の接触を取りあげればすむわけではない。両者の力関係がはじめて逆転する可能性を孕むなかで、旧大陸の文化を新大陸がどのように引き継ぎ、引き継がなかったかという視点を欠かすことはできない。それは美術の問題でありながら、また大きく思想の問題も含むであろう。そうしたテーマに取り組める研究者はそれほど多くはない。

論者は、「シュルレアリスムの世界地図」という、よく知られた図を、一種の思想地図へと鮮やかに読みかえて、シュルレアリスムがもつ思想上の問題を浮かび上がらせる。それが本論文の出発点である。人間の内界に向かうシュルレアリスムは、思想がそうであるように、現実との対決のなかでますます自己を明確化する。シュルレアリスムが敵対してきたものを、アメリカのモダニズムが引き継いでいる。モダニズムもまた、アメリカにきたシュルレアリスムとの対決のなかで、自己を明確にせざるをえない。二つの思想が交叉するところ、それが「シュルレアリスムのアメリカ」ということになろう。交叉して、一つは旧大陸に帰り、一つは新大陸で実をつける。交叉して、またそれぞれの活動へと展開する美術のダイナミズムを、論者はそのまま見つめている。美術が生命に富んで、たえず躍動していることを、論者はよく知っている。すなわち美術の問題と思想の問題を、論者は本論文において過不足なく存分に説き明かしてみせたということである。

本論文は、シュルレアリスムとアメリカが接触する一点をあつかって、触れられることのなかった大きな問題を正面から論じ、人と作品それぞれの配置を証言にもとづいて実証的に構築し、芸術家たちの作りだした現代の歴史を、美術と思想の両面から説得力豊かに生き生きと論証している。独創に満ちた研究成果である。本論文を博士（文学）の学位に値するものと認定する。